

豊かな心を育てる教材

新ふるさとでの心

小学校3・4年



香川県教育委員会

豊かな心を育てる教材 新ふるさと的心

【小学校 三・四年】

◆ うさぎのチヨロ 1

三―(一) より高い目標を立て、希望と勇気をもつてくじけないで努力する。

◆ ちよつとだけなら 5

四―(一) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。

◆ ボランティアせいそう 9

四―(二) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。

◆ おばあちゃん、いっしょに行こう 17

二―(二) 相手の立場に立って、心のかもった接し方をしようとする。

◆ さかなの命 21

三―(二) 生命の大切さに気づき、生命あるものを大切にしようとする。

うさぎのチョコ

今年の夏、うさぎのチョコがなくなりました。



チョコは、学校のしいく小屋でかわれていました。体の毛が真っ黒で、くるくるした目がかわいく、チョコと名づけられました。学校では、毎年九月に四年生から三年生へとうさぎの世話をバトンタッチしています。四年生は、もう少しでバトンタッチなので、今まで以上にはりきって世話をしていました。

朝、登校するとすぐに小屋をのぞきに行ったり、昼休みに
は当番でなくても見に行ったりして、元気に育っているのを
見守っていました。

七月のはじめ、チョコのおしりのあたりがかぶれてきました。
そこで、たんとこの先生が病院へ連れて行きました。と
ころが、じゅう医さんのしんさつによるとチョコのおなかに
赤ちゃんがいることが分かりました。



この話を聞いた四年生は、大喜びでした。今まで一年近く世話をしてきましたが、こんなことは、初めてのことでした。

「赤ちゃんが生まれるから、やわらかいわらをしいてやろう。」

「チヨコには、えさをたくさんやろう。」

と、生まれてくるのを楽しみに世話をしていました。

ところが、予定日をすぎてもなかなか生まれません。たんとこの先生は、もう一度病院へ連れて行き、じゅう医さんにみてもらいました。そこで分かったことは、『赤ちゃんは、すでにおなかの中で死んでいること。そのため、チヨコの体は、かなり弱っていること。でも、チヨコのいのちを考えると手じゅつをしなければ助からないこと。うさぎは、とてもデリケートなので手じゅつ中に死んでしまうことがあるかもしれない』ということでした。たんとこの先生は、学校へ帰って相談することにしました。

校長先生を中心として、先生方が相談しました。

「子どもたちがあんなに世話をしているのだから、なんとかして助けてやりたいなあ。」

「このままでは、チヨコまでが死んでしまう。手じゅつをしても……。こまったなあ。」

「チヨコのいのちが助かるかもしれない。手じゅつをう



けさせよう。」

校長先生の言葉で、手じゅつを受けることが決まりました。

この話を聞いた四年生は、

「チヨコ、がんばれよ。」

「チヨコ、元気になってね。」

と声をかけてはげましました。

よく日の朝。チヨコは、入院して手じゅつをうけました。手じゅつはうまくいき、その後のけいかもじゅんちようという連らくが入り、先生方もほっとしました。

ところが、その日の午後七時、病院から学校に電話がかかってきました。三十分ほど前に、体の調子が急にわるくなり、今、心ぞうマッサージをしているというものでした。たんとあの先生は、急いで病院へ向かいました。そこには点てきのくだがつななれ、じゅう医の



先生方のけんめいのちりようを受けているチョコがいました。チョコのために三人のじゅう医さんが一時間もの間、交代で心ぞうマッサージをしていていました。チョコは、ぐったりとしています。たんとこの先生は、（チョコ、がんばれ。助かってくれ。みんながまつてるぞ。）いのるような気持ちで見守りました。先生の頭に、一生けん命にチョコをはげましていた四年生のすがたが目にかんできました。じゅう医さんは、チョコのむねのあたりを休みなく、おしてくれていました。しばらくしてじゅう医さんは、ちょうしんきをチョコのむねに当てました。そして、頭を横にふってチョコのいのちの終わりを知らせました。

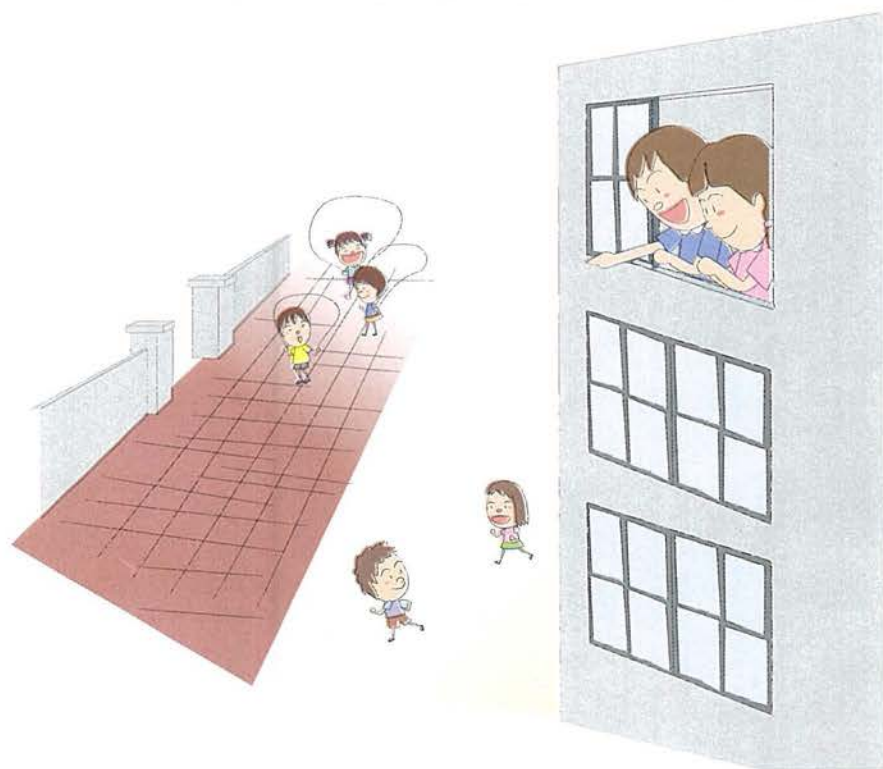
じゅう医さんの話を聞くと、死んだ赤ちゃんがいたおなかのじょうたいから考えると、ここまで生きたのは、きせきに近く、チョコなりにがんばって生きたということでした。でも、もう二度とチョコは、もどってきません。



ちよつとだけなら

ぼくの学校では、秋に新しい体育館と校しやがかんせいする。その工事のために、運動場の広さが、今までの半分になってしまった。正門を入ったところには赤れんががしかれているが、そこは、なわとびをして遊んでもよいことになっている。だが、すべりやすいので、おにごっこはきんしの場所になっている。ぼくたちは、まどから、できあがっていく校しやの様子をながめながら、かんせいを心まちにしていた。せまくなった運動場では、今までのように、昼休みにドッジボールのコートを取るができなくなった。今はみんな、おにごっこにむ中になっている。

楽しみにしていたおにごっこが始まった。ぼくは、にげる方になった。さい後までタッチされないように



にげきろうと、なかよしのたけし君と話をした。ぼくは、足の速いけい子さんに見つからないようにしようと、心ひそかに思っていた。

ドッジボールをしている上級生のめいわくにならないように、はしの方を走りぬける。そのうち、思っていたとおり、けい子さんに追いかけられたが、いきを切らしながらにげきった。そのとき、たけし君に声をかけられた。

「赤れんがの方へにげよう。あそこならおにが来ないからつかまらない。」

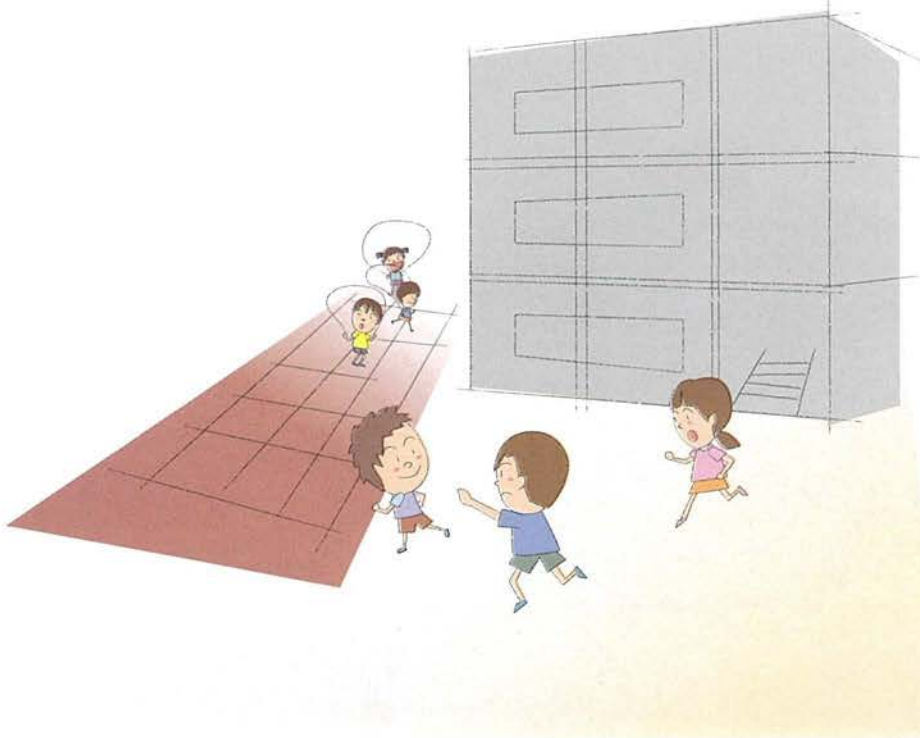
ぼくは、

「赤れんがは、おにごっこきんしだろ。」

と答えた。たけし君が、

「先生には見つからないよ。だいじょうぶだよ。」

「でも、・・・。」



ちよつとだけならいいかなと思ひ、赤れんが
の方に入りこんだ。ぼくたちは、一休みして
から、何もなかったかのようによ、おにごっこ
にもどつた。

ところが次の日のことだつた。けい子さん
においかけられて、またぼくたちは、赤れん
がに走りこんだ。(あぶない。)そう思つた
しゅん間、ぼくはすべつて、なわとびをして
いた二年生とぶつかり、二年生は赤れんがの
上にたおれこんだ。

「だいじょうぶ。」
と声をかけながらみんながかけより、顔をの
ぞきこんだ。



ひざのところさがざっくりさけて、血が出ています。ぼくはどきっとした。

「ごめんね。」

と言いながら、なっている二年生をたけし君とほけん室へ連れて行った。

ほけん室の先生が手当てをしながら、

「頭を打たなくてよかったね。頭を打って

いたら、もっと大けがになっていたよ。

あそこは、おにごっこきんしの場所だっ

たよね。きまりは何のためにあるのか

な。」

と言った。ぼくもたけし君も、はっとして、

顔を上げて先生の顔を見た。



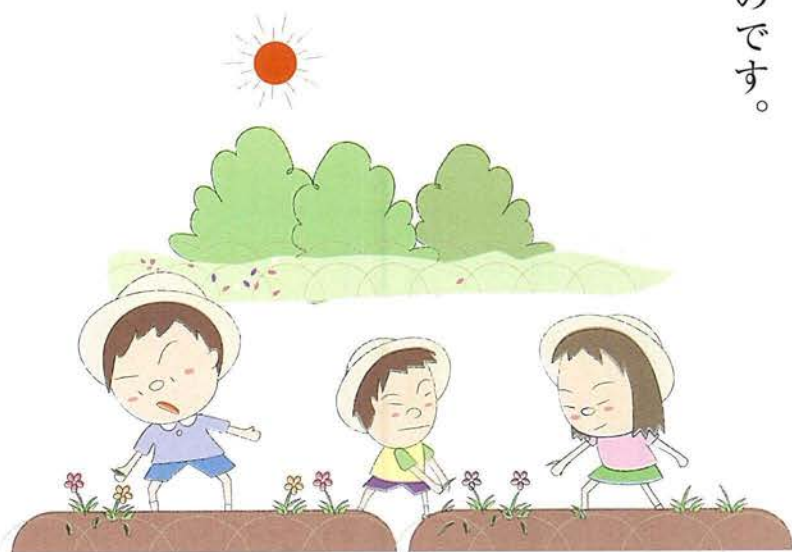
ボランティアアせいそう

夏休みに入って間もない日曜日、地いきの「ボランティアアせいそう」※注の日がやってきました。今日は、駅前えきまえの公園こうえんを地いきのお年よりの方といっしょに自主的じしゆてきにそうじをする日です。ぼくとゆうじさんは、友だちのよし子さんにさそわれて、はじめて参加さんかすることにしました。でも、ぼくは、ほんとうはあまり気がすすみませんでした。家族かぞくのみんなが、「まさお、ぜひ行ってきなさい。」と何回も言うので、しぶしぶ出かけることにしたのです。

三人が、公園についたころには、もうすでに、十人くらいのお年よりの方が先に来ていて、自主的にゴミ拾いひろや草ぬきの作業さぎょうを始めていました。なかには、何人かの小学生のすがたも見えました。まわりの様子ようすを見回して、よし子さんが、はりきって言いました。

「花だんの中は草がいつぱい生えているわね。広いからたいへんね。さあ、わたしたちもがんばって、ぬきましよう。」

ぼくは、ごみ拾いがいいのにと思いましたが、ゆうじさんがさんせいしたので、しかたなく、花だんのざっ草をぬき始めました。真夏まなつの太陽たいようがじりじりと照りつけ、体じゅうからあせが



ふき出してきました。ひたいのあせが流れ落ち、目にしみこむし、うでや足もひりひりしてきました。やっとのことで、ざっ草をぬき終えたぼくたちは、ぐったりとつかれて、木かげにこしを下ろして一息ついていました。

ちょうど、そこへ、世話係のおじさんがやってきて、

「きみたち、悪いけど、公園のトイレそうじを手伝ってくれないかなあ。今、わたし一人でやってるんだけど……。」

と、声をかけられました。

「えっ、トイレそうじ？」（やったことないし、それに……。）

ぼくたち三人は、どうしようかとおたがいの顔を見合わせました。

世話係のおじさんは、ぼくたちのこまったような顔を見て、

「むりしなくていいんだよ。おじさんは、トイレそうじが楽しいから、進んでやっているだけだから……。トイレそうじで自分の心をみがく……。これはわたしがずっと続けていることなんだよ。こんなわたしでもだれかの役に立てると思うとうれしくてねえ。だから、毎回、ボランティアせいそうが楽しみなんだよ。つい、声をかけてしまったけど、きみたちは、つかれているようだから、気にしないで休んでいなさい。」

と言って、トイレの方へもどっていききました。



おじさんの後ろすがたを見ながら、ぼくたちは、しばらくだまって考えこんでいました。

「おじさんには悪いけど、もう少し、休んでいようよ。

それに、トイレそうじは……。おじさんに

まかせておけばいいよ。」

と、ゆうじさんが口を開きました。

「でも、おじさん、一人でだいじょうぶかしら。

こまっているかもしれないわ。どうしよう。」

よしさんが心配そうにつぶやきました。

ずっと、おじさんの言葉が気になっていたぼくは、

しばらく考えた後、

「ようし、もうひとがんばりだ。」

と自分に言い聞かせて、公園のトイレへ向かって一気に

かけ出しました。すると、ゆうじさんとよしさんも後から、

追いかけるように走ってきたのです。

「おじさん、ぼくたちにもトイレそうじをやらせてください。」



ぼくたちは、おじさんのまねをして、ぼうたわしでトイレのべんきをゴシゴシとひっしでみがきました。ゆかをはいてホースで水洗いし、手洗い場の鏡もぴかぴかにしました。むちゅうで

やっているうちに、初めにもっていた、めんどくさいなあ、いやだなあという気持ちは、消えていました。

「なんだか楽しくなってきたね。気持ちがいいね。」

「みんなやれば、けっこう、できるものだね。」
と、そうじしながら、三人の会話がはずみました。

しあげに、よしさんが、もらってきた花をトイレの鏡の前にかざりました。また一だんとトイレが明るくなったように思いました。

おじさんが、

「よくがんばったね。手伝ってくれてありがとう。これで、町のみんなが気持ちよくトイレを使うことができるよ。トイレそうじで心もみがけたね。」

と、笑顔で言ってくださいました。

三人は、きれいになったトイレをながめて、にっこりと大きくうなずきました。トイレの鏡には自分たちの心がうつし出されているような気がしました。



※ボランティアせいで
町を美しくするほうし活動
(場所によってよび方や活動内ようがことなる)

おばあちゃん、いっしょに行こう

山下君と二人で学校から急いで帰っていたときのことです。信号をすぎた所で、こしが曲がったおばあちゃんに、

「ゆう便局は、どの辺にあるん。」

とたずねられました。そのおばあちゃんは、声がひどくかれ、少しよろよろしてつえをつけていました。口で説明しただけでは分かりにくいだろうなあと思いました。早く帰って遊びに行きたかったけれど、……。

すぐに考え直し、思いきって、

「おばあちゃん、いっしょに行こう。」
と答えました。





山下君もついて来てくれました。二人でおばあちゃんの足に合わせて、ゆっくりゆつくり歩きました。

(この調子だとなかなか着かないなあ。やつぱり、口で教えた方がよかったかなあ。) と思い、少し後かいもしてきました。

とちゅうで、山下君が、

「ぼく、家に帰ってくる。」

と言って帰ってしまいました。

おばあちゃんと二人だけになりました。

二人だと話すこともなく、急にしいんとしてきました。ぼくは、

「だいじょうぶですか。」

と話しかけるのがせいっぱいでした。そのたびにおばあちゃんはにつこりしますが、

返事は返ってきませんでした。

(もしかすると、耳が悪いのかなあ。)
と思いました。

チリン、チリン。急に後ろからベルの音が鳴りました。山下君が自転車で追いかけて来たのです。ちよつと心強くなり、また、三人でゆう便局へと向かいました。いつもならすぐ着くゆう便局も、このときはすごく遠くに感じられました。

やっと、ゆう便局の前まで来ました。

「ここがゆう便局ですよ。」

と言うと、おばあちゃんは顔を上げ、

「ありがとう。」





と言って何度もおじぎをしました。あまり話
はできなかつたけど、この一言はすごくうれ
しかったです。おばあちゃんの顔には、おば
あちゃんの心があふれていました。

遊びに行くのは少しおくれたけど、ぼくた
ちは、すごくさわやかな気持ちになりました。

さかなの命

「早く、早く。さかながいっぱいいるよ。」

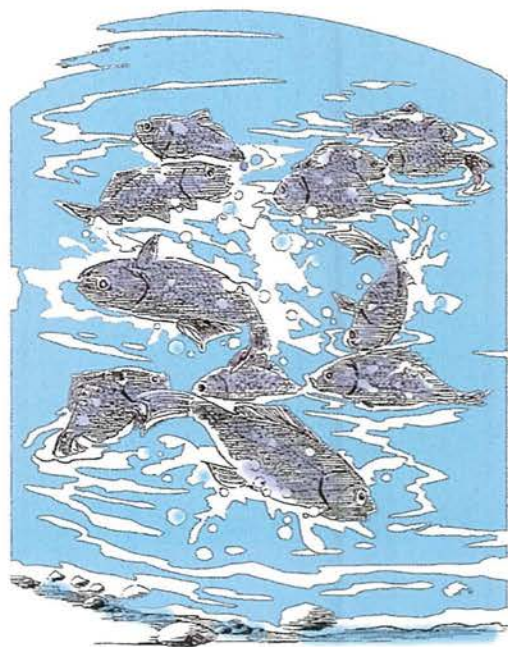
ぼくは、むちゅうでため池の中をのぞきこみました。そこにはエビやフナなどがむれをなして泳いでいたのです。池の岸をしゅう理する工事のために、水をぬいていたのは知っていましたが、もうほとんど水がないと聞き、父といっしょに見に来たのです。少し後から来た父も、

「すごい。こんなにたくさんさんのさかなを見たのはひさしぶりだ。」
と、びっくりしています。

ため池は、深さ十〜十五センチメートルぐらいしかなく、大きなフナなどは、バタバタと苦しそうにはねていました。

ぼくは、さっそく池の中に入り、あみでさかなをすくい上げはじめました。

いつもなら、水音がただけで、さっと向きを変えるのですが、今日は水が少ないためか、あまり元気がありません。手でもつかめそうです。



そつと近くまで行き、さつとあみをすくい上げてみま
した。

「やったあ。たくさんとれてる。」

あみの中でエビやフナなどがびんびんとはねています。
すばやくバケツの中に入れました。その後も、むちゅうで
さかなをどんどんとり続けました。しばらくしてふと気が
つくくと、バケツの中はさかなでいっぱいです。ぼくはうれ
しくて仕方しかたがありませんでした。

家に帰ると、さつそく母や妹に見せました。

「たくさんいたんだね。でも、もうにがしてやれ
ば……。」

「いやだよ。せつかくつかまえたんだよ。きちんと世話せわを
するから、かっでもいいでしょう。お父さん。」

何度なんどもたのんでやっとかうことをゆるしてもらいました。



ぼくは、水そうに水を入れ、エアポンプを入れました。さかなの
数からすると、水そうが少し小さいかなと思いましたが・・・。

一日目は何度も様子を見に行きました。でも、しだいにぼくの
頭の中からさかなたちのことはうすれていきました。そして六日
目の夕方、えさをやりに行くと、さかなたちがほとんど死んでい
たのです。よく見ると、エアポンプのホースがはずれていました。
しばらく見に行っていなかったのが気がつかなかったのです。急
いで水そうの水をかえてみると、三匹のさかなが生きていました。

ぼくは、生き残ったさかなを見ているうちに、なみだがこぼれ
てきました。そして、ぼくが今までかっていたカブトムシやハム
スターなどの動物たちのことを思い出していました。



次の日、生き残ったさかなたちを水の多い池に返すことにしました。家族かぞくにそのことを話すと、みんながさん成せいしてくれました。ぼくは、三匹のさかなたちがすめそうな池をさがして放はなしてやりました。そのとき、水の中に入ったさかなたちが、ぼくをじっと見て、何か言っているような気がしました。





3	ねん 年	くみ 組	
4	ねん 年	くみ 組	